靭随筆

二

863
第二
124

国立国会図書館　タイトル『靭随筆』　請求記号 863-124

ガラス使用

863-124

靭隨筆

權道茶伴著

一何ものとなく氣かまりもなくいとゝ麻
なりさま性ものろくにぶく靭を著
のまとにくもものむさくるしく
ゝるまゝに猶かうし
一ある日茶の師のもとへ往く雜談のゝち
先師六盤仙乃參るゝ

国立国会図書館　タイトル『靭隨筆』　請求記号 863-124

ガラス使用

名月や花ゐる木里へ〳〵ぞ
見ぬ事をすこしつゝを見そめて奇よ
ゆうてをれしも也 雞ゆめ〳〵忘むし
今いむの事を秋わすれ夏冬かさし
こみ〳〵護よ長年の忘花とまるいて
異れしとしされ
一霊昭女の絵をうけ物して
見るれもるる何の時賛して

春来

我ゑい稱也や遠慶と伸くゆく
その焼わわふしもうれ
行基菩薩の法羅門僧正のまとして
真如こうしたしきれ意うも
ゆれ春秋
一ひ〳〵の垂女白拍子ゆ久い大ゆ軟沼ふ
ゆゆくつけゆゆ小野宮大臣のもし
ゆひ〳〵遊女い香爐(カウロ)ゆゆわゆしい佛

淨ゝ採熊野如意観音なども世さぐら
浪ゝつやもしゝゝとふる宮ゐ
長者も普賢ゝいつゝるゝ静
微妙あるゝのゝゝやゝ利生なゞ
ゝゝ名ゝあゝ名義集ゝ摩登伽ゝ
女ゝ典名ゝあれい抵王抵女もゝゝ
磯の禅師ゝゝゝゝしゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ東鑑ゝ

建久四年里見冠者義成を遊女の別宴
ゝゝゝゝゝあれいゝゝゝゝの異
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
一男の仮名いゝゝゝのゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ奥のゝゝゝゝゝゝゝ
又滷手無片男浪ゝゝのゝゝゝゝ
奥のゝゝゝゝ片男浪乃備ゝゝゝゝ
万葉ゝ鹿又手等吉手奉奈能波奈

もわり仮名代はもわつ[illegible]なり
をゝのゝれつゝしの書かゝ音わゝゝる字い
訓よゝとの訓ぐゝとの時ハゝゝ用ゝと書くゝと
とゝゝゝゝれゝも湯(ユヒ)ゝゝゝゝゝる音ゝゆく
しゝゝゝゝゝゝゝまゝ潮汐(チヤウセキ)いゝゝゝ竿(カン)ゝる
ゝんゝ棹(タウ)ゝゝゝゝゝゝ音なゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ左小鹿(サノシカ)小男鹿(サノシカ)棹鹿(サノシカ)ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

きぬの月俊成卿の家し舟辨る辛
都鹽竈所ゆゑも舟ゐれしこそ
きゝしき名月おもわすれ六盆先師も
宮柴橋ゆゑ月ハいかゝれ時雨宮
変不無しく八百屋の奥ゝなる何の
くるしうゝ求芭蕉ハ皐月富士長角ハ
つく白井なゝとわれいとゝ
まわりふゝしわ

あゝれ親なゝゝ花の子順礼　美德
即涅槃酔ゝく倒ゝて秋野　春来
白魚ゝ同ゝ都魚　起雪
掃ゝ塵ゝゝ落椿　仙桂
降ゝ山櫻ゝ藤寺　鮮水
つくゝゝ松の若葉　美純
きゝゝ鶯の藥汁　美仲
まゝれや鳥つく道の蟬時雨　紀裳

[illegible]

燈帳と新ふかくやゝ頽市　茅德

[illegible]の白い又毎[illegible]　春堂

[illegible]月やうの空傳くく早そつる　茅山

詩を奇[illegible]ありうくく　雪小舟　関宿　阿誰

みゝしつく塔の別や蒲園雪　茅仲

[illegible]

市人や節季を退[illegible]狩衣　春来

一円意のうあつくも何風ふるる[illegible]

きりの白炭の長知みも白[illegible]

つりる雪の板ちくる化例をあるしト宅

うま婦といふうひもも延寶ふれも

いくやま婦といふ[illegible]の[illegible]

均朋ふ[illegible]堂と[illegible]

きうう一人のやうまれ[illegible]

しまゝ須あるもまたすゝ

一梅干と梅酒との別法

禅寺にて用ひる法酒法師一好

なりふ安やちきりく落て梅ゝ真党

手に入法下まる梅の題めく撰れる白

なり梅干の白ゝ白まる梅の丸

きと法師ゝ梅ゝ

枝ゝ一夏と色れ梅酒ゝ

弘仁四年ゝ手に草ゝ

一拾ゝ物食事ゝの部ゝ三月ゝ幸と食

ゝ白生薑とゝ

ゝ雑の膳信ゝ

神ゝ生薑祭食品ゝ何ゝ

一猿とゝらとゝ梵語の一轉ゝ義

集云摩斯吒此云獼猴

一妹背の道とゝ媒と花鳥ゝ

仕ましまつい戀う

一伊勢鳴宮用ゝ江戸虎屋藤太郎子
めゝ宮治加々美ら所し流譜ゝ
いせ鳴と伝せめゝ体弾ゝ其角
其ゝう專伊勢鳴ら流ゝ其ゝう

一安宅勧進帳のこと辯慶ゆわ俊章
なゝとゝもまゝ射の勧進帳ゝと
ゝみし夏ゝふ譜文ゝ況や

俊章ゆかめゝをゝ
一檜垣の謠ゝ老ゝ
とい三ゝ輪ゝむゝ
袋草紙の仮名ふゝ
ゝゝしい傳写の遠ゆ
すゝかうゝす後撰ゝ
めゝゝんゝゝひの
いゝむ

長軒朝臣（オキノリ）

年ふるまゝに我らも髮すこしの
うつもれるまゝに老ふかまるを
嫗（オウナ）の面うけ[illegible]
もらひさすはゝ余の老の度とい詠し
のゝ八重垣おぼゝ老ゝ[illegible]人とゝい
さすゝとゝふゝぬゝ全く姿のゝとふゝあるゝ
志のゝ人ゝの字ゝ[illegible]輪ゝ
ゝ澄もゝゝ博賢ゝ[illegible]

一流俗のゝもゝゝゝゝ[illegible]ゝ流俗
者人間（ヒト）謂ゝゝゝゝゝ人同のゝゝゝゝ
すゝ連歌ゝゝゝゝ清輔朝臣の説
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
澄ゝゝゝ大槩ゝゝゝゝ
ゝゝゝ梅のゝ 雪淀
歌のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 葵足
梅ゝゝ何ゝ豆腐 茅紙

恩をつむ日向をわれ宇梅のこゝろ　春龍

人のゑつ〜梅をうゑ〜植ゑ〜

まつかさ〜をうゑられ

墨おく〜男ぐ〜　梅見　許道

見るわらはの所守おかの小野　諸東

意接もむかしの鏡や　古社　海如

梅咲くはいつ〜白めの俳ちめん　関名　阿誰

梅〜雪や逆〜道もなつ〜　和貢

見袋めいて梅の野守やもの　萬三

梅咲くや外法の長のうえ　春江

さ月雨の待ぬ〜梅つ〜来　巨龍

春日路傍情

梅の花風に柳の腰を押　米鳳

雪ふ〜や老鶯のふ〜ふる　春来

鶯の古郷あれ出手の滝　紀逸

〜ふ〜寿や数の恨垣ま秋　扇裡

鶯〜投ぎ小判の光り　朱明

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一俊成卿の説[illegible]

[illegible]

附録[illegible]

熊神籬（クマノヒモロキ）　天狗（アマツキツネ）[illegible]

[illegible]

天地（アメツチ）[illegible]

鶺鴒（セキレイ）は既[illegible]

益[illegible]

一衣通郎姫（ソトホリノイラツメ）の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雲の於支天（オキテ）也[illegible]

蜘蛛のよるましい

国立国会図書館　タイトル『靭随筆』　請求記号 863-124
ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]月小月とつけらるゝ[illegible]いまと貞徳の

きゝめし説文脳月(ノウゲツ)未(ナホ)盛明(サカリ)[illegible]

朔(ヨミ)小[illegible]の[illegible]時三日の月のごとし 按

小日本紀星辰(アマツヒカホシ)おゝ古記云大星を養加保(ミカホ)

志(シ)しらゝ今の俗大蜂を養加羽知(ミカハチ) 大栗と

養加久利(ミカクリ)[illegible]

[illegible]月[illegible]

[illegible]大伴(トモノ)家

持初月の歌 振仰(フリサケテ)而蒼月(ミカツキ)見者(ミしハ)

[illegible]

夜[illegible]三月の雪[illegible] 許道

花影上[illegible]の歌[illegible]

朧[illegible]橋[illegible]鎗の[illegible] 茶仲

年中行事 哥合

三月八日の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月かすみつる花の雪見すの時鳥　龍眠

忍寒

人とゝの奥遠かりの晴月　旨原

鶯の声　赤猩々る月夜の仲　米仲

十四夜　月十三夜　百菴

大黒の銀かりつゝ十三夜　秀億

酔ふて行夜の月見哉　米仲

[illegible]十三夜　京太祇

明月いつれかるの夜十三夜　常樹

月の梅の美しき雪の気　春来

月迄もかくしつゝ枯尾花　買明

閑伽桶に風吹れ月夜の仲　米徳

一貞徳説に[illegible]の名残[illegible]

[illegible]時[illegible]初

[illegible]

いとゝ狂歌の穿鑿の辨あり是くを
阿加管伎乃加波多例（アカトキノカハタレ）等枳（トキ）爾（ニ）て万葉よ
りの考なり
一鶏冠井良徳ら書けるあか良徳いゝ誹
諧とらの字を篇（ヘン）亭（ワリ）とあたりて見れい
ろ葉にしたがいわゝすとあるをえん
連歌の風流なる河しらいかとと
りの故なりとゝるゝわれらい長頭丸のん

しも貴き良徳もあかるゝとさのし
り給ふわゝるゝわれ伝のゝるゝ変あり
大ゝにのゝゝ心てゝ
一ゝゝゝゝ其角ゝゝ俳三島傳授のゝ
ゝゝ角角ゝ伝のゝゝゝ稲負鳥を馬
ゝゝるハ猿ゝゝゝゝれいゝゝゝ
わゝゝれゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ
戯ゝゝゝ淋いゝゝゝゝゝゝゝゝ寺

[illegible]の時異人来たれども存じた俳諧[illegible]
[illegible]俳諧[illegible]
[illegible]
一西山宗因宅雅宿のわらあるべし
俳諧[illegible]作[illegible]法制を宗因[illegible]
[illegible]
宗因[illegible]
[illegible]

[illegible]東叡山
即時[illegible]
[illegible]
[illegible]山の[illegible]連奇
[illegible]
[illegible]
[illegible]川　宗因
[illegible]
一俳諧の[illegible]

少や檀林十百貞へ
徹門の眼ゆゑ
少々全ゆゑ
又
上京下京
知れぬの木の葉衣とるふよ
見よるのこゝ
移りまゝ
当世
正友
雪紫
主色
延賓のこゝ
の白い事

もつけとさくもこゝ
一こゝのゆゑ
まゝ倫
こゝ天地造化の雅
流の姿
世倫
見れい
吉
世
差別
雅
者
時
川
九

国立国会図書館　タイトル『靭随筆』　請求記号 863-124
ガラス使用

みなもとの常世と示吉の[illegible]

一芭蕉の[illegible]

花鳥と鐘と上世の清章の

[illegible]

散捨てる花のくもりも[illegible]　茅山

投げ[illegible]の笑の声[illegible]　秀曉

[illegible]の山霞[illegible]　道院

[illegible]月[illegible]六月　茅仲

[illegible]鐘[illegible]花の山　子間

本覺のいと橋や[illegible]花　巨龍

順禮の棒をつく[illegible]　默斎

詠見し酔れいつのふもとの[illegible]　許道

[illegible]

[illegible]の僧都のくらけ[illegible]

[illegible]屋の花待[illegible]　茅仲

谷の[illegible]花[illegible]　茅年

利拾く櫻の奥の月夜の角　田旦
道灌の繩ぬ山櫻　百義
狼の中伝ふ人ちさく　田社
代櫻待ちく初花ぬ　曽嵐
三千世界を眼前ぬつ
人上れりのちく
この花の海ちさまさく　梅郊
散きのちも若き櫻の如　春堂

上見る風櫻ト乃を　章雨
鐘撞の花の花を厭ふ　環山
東叡の仁王門ちく
いてまきく年ぬ
沖山ぬとその仁王といふ櫻　羊仲
名ちも枝ぬ花ちく　暁櫻　載二
櫻の如花を巫女の雪　青州
ぬ掛ちく眠るさく　由雅

ある人のかたらく四天院の晩鐘と
いふ題をとりてたとへもまれいとをる
是をもて数るゆへ珠来
白もれと同みも業のさくらび 米儀
下ちかたもくの山をくれ 吐月
歌のうち探る求堂 雨をちりろ 京 太祇

一宗釋論云大自在の朝ハ金とりつくる像ハ
梁其高サ六丈霊験あらて

求願ふ人得る時ハ龍樹の弟子提婆ハ佛滅後
多と混すべし是ハ人ハ曰神ハ
精霊とりくはと刻する彫ハ黄金瑠璃を
りくせと威炫する何とのくの鄙ハ
梯ハ釜り神の眼と鑿とくと金眼玉眼の佛
像ハいとくと提婆ごとくなる所ハ
一阿耨多羅三藐三菩提と奉無上正徧知道と
飜て今の神者とくと無上霊寶神道と

国立国会図書館　タイトル『靭随筆』　請求記号 863-124
ガラス使用

[illegible]

一ある日主師我家に見えられ[illegible]
年老て四季ふるる時流れ[illegible]き
埋火と力ゝ[illegible]ふいつのまゝ表のりの
小袖ゝ火すえつまあるをとれをかれ
[illegible]ん起よくときをひめるをえて
てゝ月さんをるむつをあてをゝ
とゝりてをかをしふかをしめ

まけ[illegible]ふりひやるしひ時
[illegible]

慚愧

所いらつの煙もたのをうまをゝ
りまをゝ代世ふりのぶりのむ　春来

一　花間をけ序

造化景色も視をふ動く聽ふ次を聞よ
居をゝ四時とをゝまものい窗なり

や梅の風ふきくるに人まくの声ふる
けい後てふ紫の南わらもれのつうら
る風薫しあとむしろ世の脇松よ
醒醐乃蟬とおくこ堂とつくゝ堅貌
まれ、国の風戸と今やこ向と言まる
角の章木と三角るゝ龍田姫乃御手染を
わまの戸ふる月乃けゝ立くゝ衣し
実毎ふく惠嵐寒向も時られいなり

ふと吹ふゝ丹波の国あいまれこ
ゆきとつくあしやと文孫家うあつ
ふ角よ花やよの紅向もれ見とふ
の新ふゝ立くの通行れめ変
し世氏の何のし余力を祝し用し
松下ふゝ手乃百花宴の与ふ
もふるまく真こふふしのふ風
くゝく是と議るわゝ角とのて佳

白の御寝とくとくの持るやうと
贈りね
りうしや歌めも大立花の名　六益
一京ちまりとも此踊ばけりうまも
わりおもふ紙王紙女佛　刀自四跡と
ニうしる所わりうれ龍しと氏ゆ
ふしれりしもるい後撰かさくあのと
とわると特集わ諸人一同さとものの

名のくに和名鈔云古語老母為負又俗人謂老
女為自刀又呼老女
為太宇女又手佐女故以於刀負耳ニて刀自
と嫗專の同ふ同ニ入れい老女の稱也
きう曾我物語の刀貝し負の字とけうる
とくと負の字かく刀わかうるゆくうるふ沢
又顕輔朝臣い早乗女の説めくあるのく
つまつ清とくとくとくとくとくとくとくる

清御原天皇の夫人字と氷上大
刀自（ヒカミノオホトシ）
大伴佐手丸（トモノサテ）の妻の字奈刀自（ナトシ）
端正美麗（タンセイヒレイ）の故海神の
ふかきを思
ふ老女あり
ふ宮女（トシメ）
ふ刀自女
続日本紀
ふれる説
蟜
力
青柳
紙雉
甘棠

雉
ふれぬ姫の渦の
ふれる妻の
賜
寸馬
走
走
雉
小鳴句宮
露英
晩羽
羽
羽
汶長
都十

人妻となりて入の事元具邸　茅宇
うけ香のいつくしぶる更衣　朱明
梅漬やくぐつい色ふ浦やうす　畔水
廿中客ゆうそわる色の牡丹の邸　茅幸
蛾蛾九月ふうやわかすし　春望
中村人第三帝人の衣の裏ふうそうれ
いふけの寄とそうれまるく都く
登りもるうの便ふしもと

まんとらふのうしの更衣　茅伸
せんそう蚊ふうもう捨る紙燭ふ　百義
ら忙ふくさんく
茅の女蚊屋ふ蚊屋ふ蚊屋ふ　佐原青藍
ふつ良わ蚊帳の中の二つ道　章雨
吸し物も入もう待宿の蝋の鎮　雞口
蘭ふう松蔵と四郎ふ左頭ふ　樣々
ものもれ男の塩ふ遣るあふ氏　萍社

風かをる唐繪の女きしの花　尾州鳴海　蝶羅
早舟に指くまく起く今朝の秋　茅帆
色紙つくる世間や星う友　茅仲
ちるや妹かさくふあるくい　茅策
罪みふ世ふ也指角う格子う角　茅岑
うくるの鳥う羽風や事むく　碑明
とくふ今宵い星ゆ負ゆう　茅仲
御服の三八うくゆ大角豆畑　山子

ゑふ情くく我門とう食　文章
穐ゑゆ小州くいかつくらくと　畔水
小町といなくゆ躍ふ　慶子
朝露や罪くくくるのたそかさ　汶長
なりしゆ心時ゑくく麻の声　尾州鳴海　鉄変
白雲や人の心くく十の指　曾嵐
ゑ仙のおゆ丸くくうの女武者　章雅
埋火ふ女のくくひ更くまう　汝章

兵をねと人の指さす頭巾哉　春望

書こりる草も埋る雪の京　環山

一樽と毒くれたりく冬ごもり　友以

鳥飾やき同の入石迄も竈たるる

おふ霜のうちとを利たるの蛟

とつるもなくく猫ひしまの者

わくうこふ祝ふ孝行ふれいれふ

のわもとをふかふのうすと通ふ

ゆふわりは故人冬籠のうちい吉

異郷ともるのかりいもふ

ふるもうくうるれ

れくふ一夜のやくまれわる

つ夜のものをれしきれい哭ハ

姥の夜見川合うるる赤山

なつくくや

老夫婦ある夜ゆ寒ゆ　黙斎

世界い夜のわくしゆ黒頭巾　茶帆

一都鳥ちいふも鴎たりとも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

拔群といせし法德院殿奉為勝光三
まくい主客功者のまことあれかさる
ことのくいかにまくもと極るしと
なり近来は発句ともに表八句大きめ
なるかめく味噌之法德院
ことものさつくみ勝延のこと
今は一句ともに意味の差別なし
一千載集　九月十三夜の月を

秋の月千とせのくもいとはとて
こしいつ見みてまるかな
はらことを千とせのこの月　真蘭
うすみくに似れるしを数ることん
詩あるへきものにくに雨ふりまさる
古今の註をすやしわかる身
一まぐさしらふ之葉いらまぐさのんかく
速の字ハヤキ　未の字ヤクキ

文字まんも不自由なるやうなれども倩字の
一源廷尉義経著赤地錦直垂紅下濃鎧駕
黒馬にまたがり義経の着給ひしとぞ
見えたり呉藍（クレナイ）も黒赤の間色（カンシヨク）なれども
あくまで緋（ヒ）色なれば分別唐令に衣紫為上
緋（ヒ）次に緑（ミドリ）為下（ト）とあり紫の朱（アケ）なれば
しらふにめくれば袈裟の緋（アカ）色の深きを
ぬやとこそあれ扨は接ありける

一とりあつめたるの色目
用ゐられ是中に二百のわかれとぞ
ゆられもする

獨寝獨起　小栄ふかきを
玉棚かきさしをわんぬ　春来
れば地めづらしき蘭麝の香
辻施餓鬼是生めつるかな
赤彩と西瓜腹ハ変差別

[illegible]秋の味噌すり坊を他所坊
けせう鳥[illegible]川の滝
ウ
観音の躍を居[illegible]
同麓の口の谷[illegible]
寺中[illegible]羅漢堂や[illegible]川や
三日の精と[illegible]
蓮の[illegible]饅[illegible]
[illegible]月[illegible]の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]の月虎屋大隅[illegible]煙
[illegible]
露の世の[illegible]
[illegible]書付[illegible]楽
[illegible]の不化の子[illegible]
常[illegible]

国立国会図書館　タイトル『靭随筆』　請求記号 863-124
ガラス使用

石摩八月九日

[illegible]

欠落の[illegible]

[illegible]

[illegible]の法師ら勝[illegible]

[illegible]の牛や[illegible]

白[illegible]の馬[illegible]

[illegible]月[illegible]

[illegible]の下達[illegible]佛も秋の[illegible]

[illegible]

[illegible]入り法の用の百[illegible]

[illegible]のわ[illegible]け[illegible]

[illegible]のように[illegible]

[illegible]人[illegible]の書写山の僧

[illegible]下も[illegible]んで聖霊かつ[illegible]

[illegible]

人の中くもし名をもとめ
花のさかりなれすまきの
こと合てこいの回りをみく
もれとも人の見ぬ所あること
なくこそ名氏とうられけり

八月ろのひら誹諧盃をみることを
時世事所のなく本李白の愚尼公
清溪(セイケイ)三峡(サンキヤウ)の間の月をとりわけるみ
ちもし良花の白の君としらして

月のうんしたりのこと
なりやうく

八月の初の九書るとして　春来
君ふらるる夫安
の間く農とまるうかいやまのつく
うのこともせようとれまいらい
猶さしのくの年の趣意もらう
に御なむしとして

国立国会図書館　タイトル『靭随筆』　請求記号 863-124
ガラス使用

先祖より我新まり月の友　存義

頼枝かうるはしくまさりたる月　泮社

名月や峯と月とのあはれ　麦丘の猫　黙斎

新月はまろかりけり満願寺　栖窟

さらぬ夏て箱根八月のあるるかな　雪淀

新月は海も露りの豊かなり　茅仲

名月や舊記に高ころ　周防　阿誰

明月や洲の松陰の野川まで　春江

元祖とかうさけ見れば月　茅幸

くもりなく衣きわる山の帯月　珠来

名月の中くまわや草の伏屋　吉門

生涯や今宵八月の新と嘆く　茅仲

見ぬ秋とはるる秋のくもり

月今宵四角に新の親たくく　子園

盛長よ酌とくもるの月　柳尾

一日わらふいつるふ今日の月　佐原　百道

名月や人かとうる海の荒　平砂
有明のうく生て居てきぬの月　紀逸

旅店

いとや月国を隠す里五十三　宋徳
秋晴や人の新置く月見武　佐原青盛
酒ぬるるとさらうえぬる月　宋仲
行隅の蛙屋よ秋いのきぬの月　十曉
名月やゆるる親しき明け烏　朱明

雄しきに寒し今月能都寺　環山
名月や佛く居る月見武　梅郊
そこかしこ不用の人の月見武　宋仲
古き世のりよりそ月見武　雅口

竹裏月

荷ちらし金不破しし弁の月　遊羽
名月や毎るるきに帆ちきに　道院
名月や今宵小虫のきくあり　龍眠

利頂や待賓門のもとに歌 春望
空にまつのうらに袋も月の色 露寺
関守のねぶりいつ今るの月 ザ民
一経〳〵金銀瑠璃珊瑚琥珀なと備くる
呉音梵音相交りし猫瘡い梵語めし
青色寶〳〵譯を頗梨い鬱〳〵水精也
一君とらふ玉葉いとうつくしもるるとう
将軍義尚公近江ふ鈎里の陣中へ内

り後土御門院御制製をあるる
君すゑんい人のつの鈎とも
さとをいまくふ後のなとめ
義尚公のへ〳〵
人人物の星をくんのをとも
直をる君代よつくる
一木曾義仲あいあつし巴とも二人の将軍
わり義をを寺山の合戦わ

まとめてまいらせられけるの如くそなたの
鋪(トモエ)繪いとのこまこまとかきたる人にみ稀し
幸に不幸に軍防令みな征行(セイカウ)者皆不
得將歸(ヒキ井テ、ソノナラフ)女自(ヲンナヲノヅカラ)隨(シタガフ)上(ニ)
一一憂斬貞室獨吟百首
秋日從女院(ニ)所稱(ヒ)櫛出(ハ)御(ス)
て曙の山のと國さたをり内侍
とゝ官祿領しまうけるの

余り此歌をもてまいらせけ百首のうちに
こゝに伸らかなる
曙の嚴忍うしろ秋の山　貞室
の月る出事先家のむけ
方られれ初雁の風鈴ゆ
類樹ゝいまの心ゝ
一位(シヰ)國(テイ)憲(カ)家(ノリ)隆の卿はなくい青(シン)ホ
明の色高位とゝ
高位とゝ御(ミ)堂(ダウ)

道長公一條兼良公はとてもの
又和尚の德おもしろい柿本朝臣人麿山部
宿祢赤人と書おもしろ
亜相（アシヤウ）黄門（クハウモン）はほの西落ちる
もの故のこと
一大閤しの御息子関白をもつとめられる時
しの家のもの禪閤となりとも
東鑑に清盛入道と平相国禪

閤と見えたり頼家卿と左金吾禪閤と
あり是もまたまたまたまたまたまたまた
一小野小町の遍照とたたかる寺ハむ
つまよ清めおきてしかも見し後撰
あいたのこと寺ハ西にてやとまりて
なれと後撰の異本ハ遍照と素性
と何樂しく不審し古歌のこと
思われいまもまた迷ふまたい

一近衛院仁平三年四月鵺(ヌエ)とりあるけ怪鳥の
内裏のうへにて鳴こゑ兵庫頭頼政朝臣
にけさせたまふに是射落とこゝにみ所
のくに常の鵺(ヌエ)鳥と見あはせ訓抄に
云金院御殿のよるの鵺のこゑをあ
きなしとて頼政に射とらせ畏て宣旨
をかうむり仁中かりのけるに至てまちい

さまをあらはれ得ざる事なれ共月の空曇ふ
かくあるべきにあらずとて怪
亦異形の姿にかゝりて怪るの二字をつて
後人仮名をもてものの諸書ふくとも院の
御宇わかり十訓抄に高金院と見えたり
等〻頼政卿の鵺を射とめられしと
あるべきにあらず書あまたとも正史ふ是あるべ
一寛文の比にいたり非李詞のこゝろ

うけうふ　とん風　花姫　花舞

天川　雛菊の頃　梨椿菓子

赤瓢の枝　くまく霜　霜うつり　池潛

の原　りかたうつて　一日の姿　めくるの

松の　の季　とること　當風　法御月

ちちやの　汐の　るる　つの　るれ

汐干　名月　小押　出　ていた　る例

めし　ちち　ちち　ち

鞦味噌の　ちんもの　潮干狩　潛

松ちち　ちち　蛸　ちち　汐干うれ　茅仲

人もき　ふ　汐の　鳴や　ひ　潟　常樹

ちち　潟と　鯛　ふく　ちち　汐干　中和

見　前ふ　清ち　流ち　潮干　春来

舟ち　ちち　ち　ケの　潮ち　其風

乙姫の　ちふく　見ち　る潮干　武　茅仲

堀ち　舟ち　ちち　ちち　武　碑明

田み[illegible]拾く蛙や歌の寄[illegible]色　湖十

白魚い周とそくるまくき　五紘

とくく魚い海と徒し用う作　茅仲

ふ魚の天と農くるる鴉の角　吉門

白くとふ天人生ぬ[illegible]　再賀

白魚の網の昼ぬくく鱧　茅仲

ふくやくく色ふ井の里　湖海

蛙ふくふの雨のくく所　西山氏　魚川

傘へまくくく迎ふうつう作　臺簡

声くやふ田の蛙と帰日士　友以

釣井とのまくる蛙の夕作　茅審

菖蒲の橋のトゆくく胡蝶　飛鯨

子の鳴ふむれつくくやさく貝　機夕

一網くく白ふいくくくくくく　茅帆

作やくくふ育ったふ風丹　子周

雲ふれくく温泉ぬと味くく川や鼻雨　春来

きけまれや浪さへぬれて　青蓮　茅仲
庵寄る河柳やうかつるる　蓼
明ぬふ鵜舟を暮て　庵芳り　茅鳳
しら中ゆふ雨ぬるるこの一ふと
まつけるる今ふ鵜をつかつて
月のきしわのうをのの鉦
なしらしく金ちりくもるふ
みしよの中ふ首ちく鵜舟　黙荷
うのくしよ鵜舟　許道

我新も流るくまもとしらぬ　牛呑
巖の花ふ酒のまぬ菴を獨ふ　西山　魚川
涼しさ松ふ法しふ浪のいろ　十曉
形代やとふ屠ふ須ふ赤石　永機
雲とくしたりつ玉ふ川ふ　茅仲
秋まあと舟ちらくる柳ふ　春堂
川中やふ夫ふ見まる秋のふ　海如
ふ結の音何ふ響や　斤鋏　茅仲

村居皇陽

[illegible] 春来

湖のうらわ[illegible]滝の暮　買明

羅漢寺の見渡か舟中いとれ[illegible]

なく鳥や二月四月のの園　茅仲

[illegible]　再賀

[illegible]鳥の夜[illegible]　永芳

鶯や[illegible]紅葉の[illegible]　牛春

川[illegible]　旨原

[illegible]　茅山

火を焼く野原か人待時雨　清泉

波[illegible]舟[illegible]　慶子

松風[illegible]夜の千鳥　葉也

わ[illegible]衛　春来

猶[illegible]待[illegible]　平砂

[illegible]　祇亟

あらしもの雌島雄島やの道　茅宇
みの島い水中絵とゝすゝ　菊丸
千島うれ行舟　初ゝ猟船　四川
みちふまゝ月のさゝ山　青霞
水鳥ゝ居まゝ　ゝ色わせ川　花鯨
うゝるや雨ゝ　ゝうゝ　碑明
満ゝり潮ゝ連ゝ　海嵐　和貢
ゆゝゝゝゝ鷺ゝつゝ　寒　呑江

鴨つゝゝ岩ゝゆゝ　ゝのうゝ山　茅審
松ゝ迎ゝ浪ゝ　ゝ千島　薛社
草枯や馬場ゝ　ゝ野路の川　匂灼
ゝゝ鳴ゝ　ゝ千ゝ　海如
居信の湯舟ゝ　ゝ　百義
御祝や羽代の　ゝの勝ゝ　中和
巨燈ゝ　ゝ　ゝ夜の千島　紀賞
本ゝ　ゝ　ゝ敷の星ゝ　春来

国立国会図書館　タイトル『靭随筆』　請求記号 863-124
ガラス使用

863
124

14211

一集仙傳云ふ〻の道士あり甕(モタヘ)に酒を満し
め教へていはく能く是を飲ませやうに仙去
すしと時に麦をうつ者みな家全家
拳(コリウ)〻是をの心一時に輕く拳(アカウ)〻空裡よ
麦をうつ声をきくのごとく空中の
むきつまま唄(ウタ)何の為ぞあらん笑ひへし

国立国会図書館　タイトル『靭随筆』　請求記号 863-124

ガラス使用